

# 肌で感じた「魅惑の世界」 目を、食を、絶景を、遊びを

毎年恒例の「日遊協ディズニーランド・ラスベガス研修2013」ツアーが11月5日(火)から10日(日)までの日程で催された。今年、5社38人が参加してエンターテインメントの本場・ラスベガスとディズニーランドを視察し、エンジョイした。参加者のひとり井手口博明氏(ジャパンネットワークシステム(株))にツアーをレポートしてもらった。

ラスベガスに到着した一行。期待に胸をふくらませて



壮大なグランドキャニオンの絶景にびっくりしながら記念撮影

成田を15時10分の飛行機で一路ロサンゼルスへと旅立った一行は、到着するや早速ディズニーランドへ移動しました。カリフォルニアでは「ディズニーランド」と「アドベンチャーパーク」のオプションで、私たちはランドを選択しまし

た。男ばかりのメンバーにも関わらず、園内の雰囲気そんな事を忘れさせてくれました。「これって一人分…」  
なんとと言ってもファミリー&カップルの仮装が凄い！子供たちにシンデレラや、ピーターパンのコスチューム、カップルはディズニーのペアTシャツ&頭にはミッキーの耳を付けて闊歩しています。むしろ私たちの方が目立っています。う始末でした。

「これって一人分ですか？」って聞きたくなる大きさ。ドリンクはモールを頼んだはずなのに日本のラージサイズが目の前に。17時に集合し、シエラトン・ホテルへチェックイン。飛行機10時間移動の疲れか、ディズニーランドではしゃぎ過ぎたのか、その日は参加者全員就寝となりました。  
**壮観の一言、噴水ショー**  
翌日、ロサンゼルスを離れた一行はマッカラン空港へ到着、バスに乗り込んだ時に事件発生です。

ちよつとお腹も空いて、本場のハンバーガーでもと思い、その名も「ハンバーガー・ベアー・レストラン」に入りました。たどたどしい英語での注文が通じてほっと一息。ところが、出てきたハンバーガーに唖然、「これって一人分ですか？」って聞きたくなる大きさ。ドリンクはモールを頼んだはずなのに日本のラージサイズが目の前に。17時に集合し、シエラトン・ホテルへチェックイン。飛行機10時間移動の疲れか、ディズニーランドではしゃぎ過ぎたのか、その日は参加者全員就寝となりました。

**恐怖感じない？娘が**  
お酒も入って上機嫌の夕食後、ダウンタウンの視察に出かけました。ストラトスファイアタワーは、テレビ映像などで一度は目にした人が多いのではと思いますが、ここで有名な3大アトラクションが①ビッグショット ②インサニティ ③エックススクリーム。①②も尋常じゃ無く恐ろしいアトラクションですが、③エックススクリームに関して言えば考案者に「何てことしてくれんの！」と言いたくなる代物でした。ところが、それに乗り込んだ仲間の女子がいました。

バスの側面のドアが閉まらない。ここで登場したのがサンキョー(株)のHさん。彼がものの数分でトラブルを処理し、大歓声の中拍手喝采でした。  
バリーズ・ラスベガス・ホテルにチェックインした一行は、夕食までの2時間、街の雰囲気を肌で感じるためお出掛け。久々にワクワクドキドキな高揚感を味わう街並みでした。中でもベラッジオホテル前の噴水ショーは一見の価値ありで、5万mの広大な噴水で、BGMに合わせ立ち上る水柱は壮観の一言でした。



## ラスベガス研修参加者

阿部恭久、池田孝二、馬場秀孝、大木薫、佐々木貴光、鈴木司、前田真輔、常田雄貴、井川英和、岩丸直樹、宮本祐弥、白倉優、飯泉一樹、相原圭貴、小林浩平、大久保貴浩、高橋典也、早川翔平、山本研人、平出浩一、原博輝、中澤佑香、矢部友子、加賀谷由利恵(以上サンキョー㈱)、藤野政孝、田中公也、鎌浦勇樹、三宅貴洋、岩岡敏宏、岩岡理恵(同㈱山口商事)、田宮宗昭、井手口博明(同ジャパンネットワークシステム㈱)、山田浩司、細井良平(同㈱プロテラス)、山本拓哉、豊田淳、浦義人、豊田雄次(同㈱アサヒディード)

と対峙しましたが、どんどん吸い込まれる20\$札。ドリンクでも飲みながら小休止。思いきってデイーラーと差し向かいでブラック

ジャックと思い立ってもあと一歩が踏み出せない小市民でした。「表現しようがない」最終日は、私たちツアー客のうち9人がオプショナルでグランドキャニオンツアーに参加しました。周囲から「絶対見た方がいい」と太鼓判のツアーですが、一抹の不安は、私が高所恐怖症だということ。思い切ってセスナに乗り込み片道1時間、ひたすら続く砂漠を見てみると、映像などで見覚えのある風景がいきなり目に飛び込んできました。眼下に広がる風景が「グランドキャニオン」でした。いろいろとボキャブラリーを駆使しても、表現できない雄大な景色がどこまでも広がって、「人間ってちっぽけだなあ」としみじみ思う絶景でした。

最後の晚餐となったレストラン、ローリーズは肉好きにはたまらないお店でした。焼き加減はミディアム・レアで注文、運ばれて来た肉の厚み、大きさに圧倒されながら滴り落ちる肉汁に夢中になりながらナイフ・フォークが進む、進む！最高の食事会となりました。**締めはテーブルゲーム** 明日は早朝4時30分集合で早く

就寝するべきなのは承知していましたが、私にはまだやり残したことがあります。小市民脱却です。ホテルに帰るやいなやカジノへ直行。今日こそはデイーラーと対決すると決めていた私は、ブラックジャックのテーブルへ。レートをしつかり確認して、10\$からと表示のあるテーブルに目星を付けいざ挑戦です。相手をしてくれたデイーラーは当たりでした。HIT(もう一枚くれ)の合図をすると「やめとけ」の仕草をするのです。じゃ言うとおりにしようとしてAND(もういらぬ)の合図をしました。すると、デイーラーが24でドボン。「私のカードをよく見て。表になったカードが6でしょ」「デイーラーは17までは引かないといけないの」「ドボンの可能性が高いから貴方は引くべきで無かったのよ」って言ってる気がしました。最終結果はどうであれ、言葉は半分くらいしか分からなくても、対面でゲームを楽しめた事に大満足のカジノでした。

文化の違いを感じる 今回の研修を通じて感じたことは、デイズニerlandに関して、

3日目はチャーターバスに乗り込み、5か所のホテル&カジノ視察。各カジノの特徴があり、1968年創業の老舗カジノやロケットをモチーフにした日本でもお馴染みのハードロックホテル。高齢者向けのカジノもあり、2007年創業の「レッドロックカジノ」は最も高級感が漂い、最新機種が並んでいました。ホテルに戻って待望の自由行動になり、たんまり両替した\$を懐にいざ出陣です。小手調べに1セントレートのスロットルマシーン

あり、そこに文化の違いを感じました。ラスベガスでは、街全体がエンターテインメントを演出し、訪れる人全てがエンターティナーと思える雰囲気を出しています。私たちの業界では、共存意識、地域に対する一体感よりも競合他社との競争の中にある感じが否めません。ラスベガスの街に、習うべきことが少なからずあるのではと考えます。そのうえで、日本は日本の「おもてなし」を追求していくべきでしょう。(井手口博明)

日本ではデイズニerland側の、いわゆる迎える側のシヨビジネスとして捉えたら、アメリカではお客様自体がその場を楽しもうという雰囲気がある、そこに文化の違いを感じました。

最後夕食。ビッグなステーキに舌づつみ



最後夕食。ビッグなステーキに舌づつみ



本場のデイズニerlandは一味違った